

2013 年度第 4 回物学研究会レポート

「モノをデザインしないデザイン」

山崎 亮氏

(コミュニティデザイナー、studio-L、京都造形芸術大学教授)

2013 年 7 月 23 日

以下サマリーです。

モノをデザインしないデザイン

山崎 亮氏

(コミュニティデザイナー、studio-L、京都造形芸術大学教授)



01：山崎 亮氏

関 今回、講師にお迎えした山崎さんは、物学研究会のディレクターの植松豊行さんをご推薦くださいました。残念ながら、植松さんは今日、会場に来られないということで、代わりにビデオメッセージをいただいております。最初にそのメッセージを伺ってから、山崎さんにお話いただきたいと思います。

■ コミュニティを創造する仕事

植松 みなさん、こんばんは。物学研究会のディレクターの植松です。本日の物学研究会はコミュニティデザイナーとして活動されている山崎亮さんをお招きしています。私の方から、山崎さんのプロフィールを簡単にご紹介させていただきたいと思います。

山崎亮さんは、大阪府立大学農学部、および同大学の大学院を卒業され、在学中にはオーストラリアのメルボルン工科大学環境デザイン学部留学されました。2005年に「studio-L」という会社を設立され、多彩な活動をされて大変多忙な日々を送っていらっしゃいます。

また、現在、京都造形芸術大学芸術学部空間演出デザイン学科の教授でもいらっしゃいますが、来年はその姉妹校の東北芸術工科大学にコミュニティデザイン学科が新設され、学科

長に就任されると伺っています。ちなみに 2008 年から私も東北芸術工科大学大学院の教授を務めております。

山崎さんは現在、コミュニティデザインの活動をされています。人とつながる仕組みをつくり、人のつながりによって未来を変える、あるいは希薄になった人のつながりを日本各地で再生する取り組みを行なっています。コミュニティデザインというのは、モノをデザインしないデザインです。コミュニティを生み出すことが重要で、それによってモノづくりの価値の気づきを促し、モノや仕組みを導き出していくということを考えられているのではないかと注目しています。

物学会ではモノ、その仕組み、人の立ち居振舞いなどに対して新しい価値を創造して、社会に貢献することを目指しています。山崎さんのご活動は、そうしたわれわれの考え方に通じるものがあるのではないかと考えています。今日は人と人とのつながりから、新しい価値をプロデュースされている山崎さんのご活動のお話から、みなさんに新しい気づきを感じ取っていただけたら幸いに存じます。

■最初のプロジェクト

山崎 今、植松さんからご紹介いただいたように、私は現在、「studio-L」という会社を拠点にコミュニティデザインの活動を行なっています。会社名の下に自分たちの活動内容を英語で「Community Empowerment by design thinking」と書いています。できればこれを日本語に訳したいと思っているのですが、どう訳せばいいのか悩んでいて、そのままになっています。

初めは「by design」までだったのですが、デザインという言葉はモノをデザインするという印象が強いので、モノをつくってコミュニティを元気にしていくというふうに誤解されてしまうかもしれないと思い、「design thinking (デザイン思考)」という言葉に変えましたが、また今後、変えるかもしれません。簡単に言えば、私たちの活動は人々にコミュニティの力をつけて、元気づけるデザインを考える仕事です。

手がけた仕事をいくつかご紹介していきたいと思います。コミュニティデザインとして、私が最初に手がけたのは、兵庫県にある「有馬富士公園」のパークマネジメント支援のプロジェクトです。これは私が設計事務所に在籍していた時から、2001年から始まっていました。野球場 30 個分くらいの広大な面積があり、完成した後も地域の人にたくさん使ってもらえるような運営計画のようなものをつくってほしいということでした。

近くにある博物館の先生たちと一緒に考えていったのですが、私たちは地域の NPO などの市民活動団体の方々に公園の各所でいろいろなプログラムを行なってもらうことを提案しました。行政がすべてを管理・運営するのではなく、市民参加型の公園にできないかと考えたのです。現在はそうした団体によって、水辺の生き物の観察会や天体観測、ピアノの演奏会、凧づくり凧揚げなど、年間を通して多彩なプログラムを展開しています。

公園の中に遊具をいくつかつくって置いておくというのもいいのですが、遊具が人に声をかけてくれることはないですね。でも、こうした活動に参加していると、人と人が出会って仲良くなって、次に会った時に「久しぶりですね! どうしていましたか?」という会話が生まれ、人のつながりができていきます。

■人のつながりが空間を育てる

マーケティングの先生がおっしゃるには、テーマパークの来園者数というのはオープン時が一番多くて、徐々に減っていくのだそうです。新しいアトラクションをつくれば、来園者数はまた増えるそうです。この公園では新しい遊具など増やしていないのに、来園者数は一度も減ることなく、ゆるやかに増え続けています。

公園がオープンした年の来園者数は年間で約 40 万人でしたが、5 年後は約 70 万人に、昨年は約 80 万人でした。ここで活動する市民団体の数も最初は 22 ですが、現在は 85 とどんどん増えています。つまり、人と人とのつながりが日々、この公園を豊かな面白い空間に育てているのです。私にとってこのプロジェクトは、ハードをデザインするだけではない、新しいデザインの仕方があると実感でき、手応えを感じた仕事になりました。

大阪の「泉佐野丘陵緑地」もパークマネジメント支援のプロジェクトです。これは私が設計事務所を辞めて、独立した後に依頼された仕事です。基本計画が立案された直後から関わり、府営公園として今年の開園に向けて現在も準備しているところです。そこはもともと山だったところなので、すべて整備するとなると莫大な費用がかかります。そこで私たちは敷地面積の 2 割の部分だけを整備して、そのほかは地域の人々につくってもらうということを提案しました。ここも市民による市民のための公園になればと思ったのです。

そこでまず、木を切ったり、道をつくったり、ベンチをつくったりする、この公園をつくっていくボランティアの人を育てようと考え、2009 年からその養成講座を始めました。現地見学、樹木調査、間伐体験、広報など、公園づくりに必要な知識や技術を学ぶ内容となっていて、計 11 回行ないます。この講座を修了すると、大阪府知事の認定書が授与されます。

現在、5 期生を育成しているところですが、講座を修了した 1 期生から 4 期生の方々はもうみなさん手慣れてきて、お昼の時間も忘れてしまうほど夢中になって作業をされています。終わった後に一緒に飲みに行ったりもされているようで、連帯感も生まれてみなさん楽しそうです。こうしたボランティアは一年間に 30 人育成しているので、10 年間で 300 人誕生する予定です。今後もこの公園は私たちではなく、その彼らがつくっていくのです。

■市民とのワークショップ

私たちの仕事では、市民の方々とワークショップが大事な部分を占めます。プロジェクトを行なうためには、やはり彼らの理解や同意を得ることが一番だからです。話し合い、お

互いに理解を深め、意見をまとめていきますが、ここでも大事なのは人のつながりをつくっていくことです。

グラフィックデザインについてもいろいろなことを考えます。重要なのは、テーブルごとに出てきた意見を簡潔にまとめて構造化して、一目見てわかるようなデザインを考えることです。その際に市販の付箋を利用して、水色、ピンク、黄色の3色を使い分けながら、そこに意見を書いて白板に貼っていきます。ワークショップ終了後は、今日、出た意見をニューズレターにまとめて、次回、配布します。

自分の出した意見がどういうふうにとまって書かれるんだらうと、参加した人たちが興味や期待を持ってもらえるような創意工夫をしていかないと、こういうワークショップというのは油断すると参加者がどんどん減っていきます。このワークショップは面白い、一緒に行こうとほかの人を誘ってもらって、どんどん参加者が増えていくというものにしないと、こうした地域での活動というのはなかなか長続きしないと思います。

広島県の「福山市中心市街地 賑わい創出活動支援事業」は、駅前の商業地区の活性化を図るというプロジェクトで、市役所の各課の若手13人の職員にワークショップの協力をお願いしました。最初に彼らにワークショップのノウハウを学んでもらい、その後、私たちと一緒に実際に市民の方々とワークショップをコーディネートして行きました。最初はみなさん緊張されていましたが、最後には市役所の職員と市民との間に強いつながりが生まれていました。

■さまざまな手法を使って

どのプロジェクトも依頼される内容は同じようなものですが、毎回、新しいデザインを考えます。手法もさまざまで、アウトプットもすべて異なります。同じことはやりたくない。新しいデザインをしたいのです。それはデザイナーの性だと思います。けれども、それはとても効率の悪いやり方ですし、儲かりません。儲かる仕事というのは、かけ算の仕事ですから。私は自分たちのやっている仕事面白いと感じることだと大切だと思っています。面白いと思わなかったから、続かないですからね。

香川県の「観音寺まちなか活性プロジェクト」も駅前商店街の活性化を図るというものですが、広島県のプロジェクトとは異なる手法で行なっています。依頼者は、商店街のオーナーたちです。今、地方の商店街のオーナーというのは60代、70代の方々と、若い人はあまりいません。

私たちは最初に現地に行ってフィールドワークを行なうのですが、ある時、ひじょうに面白い現象を見つけました。それはお店の中に別のお店が入っているということです。たとえば、全体としては下着屋さんなのですが、その一部にケーキ屋さんが入っているというお店です。もともとご夫婦が下着屋さんをやっていたのですが、息子さんがパティシエになって戻ってきてどこかに店を借りたいと思い、それだったらこのお店の中でというのが、事の成り行きだそうです。

観音寺にはこういうひとつの中にお店がもうひとつあるという、クロスプログラミングされたお店というのが、ほかにも花屋とカフェとか、着物屋とパン屋、クリーニング屋と餃子など、たくさんあります。戦後、商店街ができて、70年代は商品を置けば売れるという時代になり、たくさんの商店街ができたということを聞きます。2000年になると、お得意様が買ってくれるものしか置かなくなり、お店の中に空間ができ始め、そこに息子のケーキ屋さんのような別のお店が入るという現象が起こっていったようです。

その一角のスペースを借りるのは、実の息子でなくてもいいのではないかとふと思ったのです。若くて何か商売をしてみたいという人がいたらお店の一角を貸してあげて、そこが手狭になったら別の場所で商売をしてもらえばいい。つまり、インキュベーションとして、若者を育てる場として提供して、別のお店へと発展させれば商店街全体がまた活性化されるでしょう。今のところは、お店の一角を若い人たちに一週間くらいの短期間で貸すということを試験的に行なっているところです。

■地域の人々に還元する

鹿児島県の「マルヤガーデンズ」というのは、もともとあったデパートをリノベーションした複合型商業施設ですが、このプロジェクトも街の活性化がテーマにありました。デパートやこうした複合施設は人離れが進んでいるので、いかにその場所が公共性を持てるかを考えることが大事だと思います。言い換えれば、こういう商業施設はほかにない、私たちの街になくてはならない存在だと地域の人たちが思うような魅力的な存在にしなければなりません。

私たちはここでも地域に根差した市民活動団体の方々に協力をしてもらうことを提案しました。この建物の中に「ガーデン」というオープンスペースを10個つくって、そこで彼らに展示会やイベントなどを行なってもらうのです。それによって買い物に来た人がコミュニティの活動に参加したり、イベントなどを目当てに来た人が帰りに買い物をしたり、カフェでお茶をするような人の流れをつくることを考えました。

近江商人の経営哲学にもあるように、CSRというのはやはり買い手と売り手と世間がよくないと成り立ちません。売り手よし、買い手よしで、いいものを安く買えるだけでは、もはや商売など続けられない時代です。

私たちがプロジェクトを行なう時に特によく考えるのは、世間よしの部分を現代的にどうつくるかということです。つまり、その地域の人々にどういうことを還元できるかです。現在、「マルヤガーデンズ」の10個のスペースには220の団体関わって多彩なプログラムを展開していて、連日、地域の人たちで賑わっています。

■中山間・離島地域でのプロジェクト

われわれはこうした都市部以外にも、中山間・離島地域のプロジェクトも行なっています。

2009年に「瀬戸内国際芸術祭」の実行委員会の方々から出品するアート作品をつくってほしいと依頼を受けたのですが、私たちはモノをつくらないデザイナーなのでと言ってお断りさせていただきました。ところが、今年また依頼をいただいたので、私たちがつくりたいのはコミュニティなので、コミュニティアートだったらお引き受けしますと答えました。つまり、住民たちと一緒にアート作品をつくるということです。

そして、小豆島の住民の方々とのアート作品づくりのプロジェクトがスタートしました。どういふものをつくるかということ話し合う前に、まず住民の方々にアートのルールを説明するワークショップを行ないました。みなさんもお存じかと思いますが、アートというのはそれなりの文脈があって、そのルールの上に乗っていないと批評の対象にはなりません。どうせつくるのであれば、きちんとしたアート作品をつくりたいと思ったのです。

その後、住民の方々と一緒に、島の中にあるもので作品づくりの材料として何が使えるのか調査を始めました。中でも面白いと思ったのは、お弁当の中に添えられる小さなプラスチック製容器の醤油のたれ瓶です。お弁当の規格が変わる度に、このたれ瓶もすべて変えなければいけないそうなので、使い道のなくなったたれ瓶が大量に倉庫に積まれていました。そこで作品の材料として、このたれ瓶を生かそうということになりました。

また、小豆島は醤油づくりで有名ですが、住民たちと食事をした時に気づいたことがありました。彼らは醤油の鮮度にとってもこだわるんです。醤油を入れて皿の模様が透けて見えないと酸化しているということで、新しいものと取り替えてもらったり、醤油瓶を蛍光灯にかざしてその色で鮮度をチェックする人もいました。醤油の色を透かして見るというのは島独自の文化だなと思って、それも作品づくりに取り入れることにしました。

■住民たちのチームが生まれる

展示する場所は、旧醤油会館の建物を使わせてもらえることになり、そのガラス窓一面に醤油のたれ瓶を使って高さ3メートル、幅18メートルの壁に見立てた作品をつくろうということになりました。まず酸化して売り物にならなくなった醤油を食塩水で薄めて、濃度の違う醤油を数種類つくり、たれ瓶の中に入れていきます。そして、そのたれ瓶をアクリル板に順に貼っていくと、グラデーションで醤油の色を楽しめる壁ができあがります。

これをつくるにはたれ瓶が8万個必要なので、住民全員で醤油を一つひとつ手作業で詰めていきました。ただ詰めるだけではなく、これもワークショップの場にして作業中に出た会話の中から出た案を提出してもらおうということを行ないました。そして、その中からこの展示空間を芸術祭後にカフェにするという案が決まりました。

そして、ついに作品が完成しました。陽の光によって、さまざまな醤油の色の影が空間を美しく彩ります。住民たちの結束力は高まり、気がつけばひとつのチームになっていました。彼らは知らないうちにチーム名に「ひしお（醬）会」と名付け、スタッフジャンパーまでつくってしまいました。私たちが本当につくりたかったのは、アート作品ではなく、まさにこういうチームです。こうしたコミュニティをつくりたかったのです。

■ハードからソフトの仕事へ

ひと通り、プロジェクトのお話をしたところで、自分自身の話をしようと思います。植松さんからのご紹介にもあったように、私は大学在学中にメルボルン工科大学に留学しました。そこで建築家の妹島和世さんにお会いする機会がありました。私は「これからはモノをデザインする時代ではなくなる。自分は人と人の関係性をデザインするようなことを仕事にしたい」というようなお話をさせていただいたのですが、妹島さんから「今、自分がやりたいと思うことをやってみたら?」と仰っていただき、その言葉が私の背中を押してくれました。

その後、大学を卒業してから設計事務所に入り、建築設計やランドスケープデザインの仕事をしていたのですが、やはりハードではなく、ソフトの仕事をしたと考えていました。そして、「有馬富士公園」のプロジェクトに巡り会います。その時に公園の設計ではなく、人のつながりをつくるという仕事を初めて手がけてその面白さを実感し、「人と人の関係性をデザインする仕事をしたい」と言っていた思いは確信に変わりました。それから、だんだんと CAD の仕事からワークショップや人前で話す仕事に移行していきました。

大阪に「studio-L」を立ち上げたのは、2005年です。現在では、大阪以外に伊賀、栃木、サンパウロ、2013年には近鉄百貨店の中にも事務所をつくりました。それから海士町、立川、2014年より山形の東北芸術工科大学の中に事務所を構えることになりました。「studio-L」では現在、約80地域のプロジェクトを行なっています。

関 ありがとうございます。本当はこの後、みなさんから質疑応答を受ける予定でしたが、時間がなくなってしまいましたので、懇親会の折りに質問やご意見等を直接、山崎さんに投げかけていただければと思います。また、物学研究会では9月に北京でプロジェクトを予定しています。それについて黒川さんからご説明いただきたいと思います。

■物学研究会、北京で開催

黒川氏 山崎さん、ありがとうございます。山崎さんのお話を伺っていて、時代はどんどん変わっているんだなというふうに感じました。

さて、物学研究会は10年ほど前にも上海で行なったことがあるのですが、この9月に北京で行なうことになりました。その時期、北京では政府を中心としてデザイナーズウィークが開催されるのですが、その中で物学研究会を行なってくださいという依頼をいただきました。この物学研究会では毎回、日本の大企業の、世界のトップ企業の方々が参加しているということで興味を持ってくださったのです。

会場となる建物は、建築家のスティーブン・ホールが設計したものです。何棟か立ち並ぶ高層ビルをそれぞれブリッジでつないでいます。そのブリッジの空間で展覧会と会議を行なう予定です。会議は1日だけですが、これからの未来について、これからの社会や生活について、アジアと日本の関係など、10数名のパネリストの方々に各15分ほど語っていただきます。テーマは、「未来都市」です。

展覧会では、私の作品を展示しようと考えています。ほかにも会場周辺のデザイン視察やさまざまな催しの企画も考えておりますので、ぜひご参加いただければと思っております。

以上

2013 年度第 4 回物学研究会レポート

「モノをデザインしないデザイン」

山崎 亮氏

(コミュニティデザイナー、studio-L、京都造形芸術大学教授)

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2013 BUTSUGAKU Research Institute.